

第5回 ESD 構成主義研究会 概要報告

- ◇開催日時 平成29年7月25日(火) 19時～22時
- ◇会場 中澤研究室
- ◇参加者 河野(附属小)、新宮(平城小)、島(郡山西小)、中澤(奈良教育大)
- ◇内容

『状況に埋め込まれた学習』 ジーン・レイヴ、エティエンヌ・ウェンガー、佐伯胖訳
第2章「実践、人、社会的世界」の講読

1. 学習を広く捉える

ヴィゴツキーの最近接発達領域の理論における3つの解釈をめぐって

- (1) 学習者が単独で取り組むときに示す問題解決能力と、より経験を積んだ人と一緒に取り組むときの示す問題解決能力との距離
- (2) 経験を通して身につけた生活的概念と学校等での授業を通して身につける科学的概念との距離
- (3) 個々人の日常的活動と実践共同体における活動との距離

(1)(2)は学習をスキルや知識の獲得を主目的とした教授学的構造化の枠組みで捉えているが、(3)では、全人格の成長として広く捉えている。

そこでは、実践共同体がもつ学習機能を明らかにするために、新参加者と古参加者との関係やその変化を分析することが重要となってくる。

2. 学習は実践共同体への参加の度合いの増加である

学習を知識・技能の習得過程として捉えるのではなく、実践共同体への参加の度合いの増加と見る。

これは人、行為、世界を関係論的に見る見方と一致している。つまり、学習の進化により、実践共同体への参加の度合いが変化することで、人、行為、実践共同体がたえず更新されるということを意味している。

①動機づけ・欲求の時間による変化

②社会的・文化的に媒介された経験を実践に従事中の

人々にもたれている諸関係の時間による変化を重視することで、行為者、世界、活動、意味、認知、学習、知ることに関係論的相互依存性を強調するのが、社会的実践の理論である。

・意味は、絶対的なものではなく、本質的に社会的な交渉を通じて構成されるものである。

・学ぶこと、考えること、知ことは、活動に従事する人々の関係によって変わってくる。

①世界はそもそも社会的に構成されている。(絶対的・不変的なものではない)

②活動には客観的形態とシステムがある(と思われている)

③行為者の主観的、間主観的理解がある(主観的意味づけ、コミュニケーションを通じた理解)

①・②・③は活動の経過の中で変化を受けるものである。

→ 実践の理論では、社会的世界の中の認知とコミュニケーションは、進行中の活動の歴史的発展の中に位置づけられている。

意味づけ、人々の関係性は活動の時間的変遷の中で変化していくものである。



すなわち、社会科学者の実践とは、時間的・状況的な存在である社会科学者が、時間的・状況的な対象（世界）を分析・意味づけること。動く者が動くコトを時間的（歴史的）・状況的に捉え、意味づけることとなる。

【内化】に関して

内化は歴史性のない普遍的過程ではない。（ヒトもコトも時間的・状況的）

人・世界・活動を関係論的に捉えると、

「参加」は完全に知識構造として内化され得るものではないし、人為的につくられたもの、活動構造を橋渡しするものをして完全に外化され得るものでもない。つまり、関係性の中にある。参加にともなう理解と経験は絶えざる相互作用のうちにある、相互構成的なものである。

3. 学習におけるアイデンティティ

○社会的実践の構造（システム）とそこでの参加（プロセス）に焦点をあてる

- ・社会的実践の一側面として学習をとらえるならば、学習は全人格を巻き込んだ、社会的共同体への関係づけであり、十全的参加者になること、成員になること、一人前になることを意味している。
- ・学習は、別の人格になる、ということ。



→ アイデンティティとの関連

○アイデンティティとは

人間と実践共同体における場所、参加との長期にわたる生きた関係
アイデンティティ・知ること・社会的成員性は互いに他を規定する
アイデンティティは知ることに影響を与える
アイデンティティ獲得と成員性獲得は関係がある
成員性が増すことで知ることも増えていく

○人間とは「脱中心化」である → どこまでも、どのような方向へも進化可能ということ
連続的な反省（振り返り）を通じて、学習の流れは絶え間なく続いていく
成員性も、完全には内化も外化もされ得ない。
（どこまでも続いていくし、決まった方法があるわけでもない）

4. 社会的世界と学習について

- ・共有されている意味の文化的システムと政治経済的構造化が、実践共同体で共同的に出来上がっていく学習を支援する際に、どのように相互に関連を持つか
→ 学校は、経済成長モデルを支援するシステムである。子どもを選別する装置である。
どのような学習内容を提供するのかは、相対的なものである。現在のところ、それを決めているのは、社会の中でも財界や産業界であろう（経済成長至上主義）。
にもかかわらず、伝統的な学習論は、学校教育を取り巻く社会との相互関係には関心が払われておらず、もっぱら、教育を教室内の出来事に閉じ込めてしまっている。
- ・正統的周辺参加は実践における知性的技能に関するアイデンティティの発達（個人における側面）と実践共同体の再生産と変容（社会的側面）の両方に関連している。

- ・ 正統的周辺参加は、変化する人格と変化する実践共同体の2つを生み出す共通のプロセス・関係を強調する。持続的に行われている学習とは、実践共同体の構造的特徴を具体的に再生産することである。
 - そうであるならば、どのような環境であるのか、例えば学習者が進行中の活動にアクセスする構造、技術の透明性、社会的関係（親方と徒弟、同僚との関係）、活動の形態などが検討されなければならない。
 - 共同体の再生産過程－実践者間の活動と関係の、歴史的に構成され、常に進行し、コンフリクトをはらみ、しかも共働的な構造化を解き明かす必要がある。
- ・ 学校教育では、教師と子どもの関係に着目されがちだが、正統的周辺参加では、実践共同体内の徒弟、徒弟を持つ若い親方、大親方、親方になれない一人前の職人、などの多様な関係を取り上げることとなる。
- ・ 正統的周辺参加としての学習に本来的に含まれている矛盾とは、学習者の成長と実践共同体のレベルアップは、同時に古参者の交替を意味している点である。
 - このような矛盾を含んでいるため、そこでの学習は単なる知識や技能の古参者から新参者への転移や、新参者がメンバーに同化するだけといったプロセスではない。新参者には、古参者を乗り越える知識・技能の習得が求められるだろう。その意味で、実践共同体の再生産のサイクルが、生産的ですからある、ということになる。社会、知識、技術の前進を支える。

次回は、8月16日（水）の19時からです。第3章を講読しますが、今回の第2章はかなり重要ですので、もう一度、この概要報告を見ながら、再読されることをお勧めします。

